

「教典」論考

An Essay on the Scriptures

中 澤 實 郎
Zitsuro Nakazawa

目 次

- 一 序
- 二 日本の二大宗教
 - 1 神道
 - (1) 教典
 - (2) 教えの趣旨
 - (3) 戒律
 - (4) 礼拝
 - 2 仏教
 - (1) 起源
 - (2) 思想
 - (3) 伝来
 - ① 奈良時代（南都六宗・天台宗・真言宗）
 - ② 念仏宗・浄土宗・浄土真宗
 - ③ 鎌倉時代（禅宗・日蓮宗）
- 三 キリスト教
 - 1 起源
 - 2 聖書
 - 3 ユダヤ教旧約文書の成立
 - ①律法 ②預言者 ③諸書
 - 4 キリスト教における新約文書の成立
 - ①パウロの書簡 ②福音書
- 四 聖書の正典成立
 - 1 異端の系譜
 - (1)グノーシス派 (2)マルキオン
 - 2 護教派の系譜
 - (1)ユスティノス (2)タティアーノス (3)エイレナイオス (4)テルトゥリアヌス
 - (5)アタナシオス
 - 3 教会会議
 - (1)ローマ教会会議 (2)ラオデキア会議 (3)ヒッポ会議 (4)カルタゴ会議
- 五 結語

一. 序

何れの宗教にも、その教えの根拠となる教典(聖典)を保持している筈である。教典が確立していないと、その宗教は歴史に耐え得ない。その好例は、ギリシャの諸宗教であろう。ギリシャの宗教には教典というものがなかったので、ホメロスの中に登場する神々は啓蒙時代の文学や哲学の厳しい批評に応えることが出来なくて、歴史の舞台から消滅してしまった。同じことは、儒教についても言える。戦後、韓国のキリスト教徒が人口の3割と増加した原因の一つは、この国は儒教信仰を保持していたからである。儒教には、宗教の根拠を支える教典が確立していない。日本は、中国や韓国のような儒教的中央集権制国家ではなく、国家を運営する官僚登用の科挙試験というものもなかった。儒教の八徳「仁・義・礼・知・忠・信・孝・悌」の中で適用したのは、僅かに「礼」と「忠孝」だけだったのではないか。韓国におけるキリスト教の隆盛に比較して日本のキリスト教は低迷している。日本は儒教国ではなく、強固な国家神道という宗教が存在していたからである。⁽¹⁾従って、日本は、中国のように共産国にも、韓国のようにキリスト教国となることも、先ずない。神道については後で述べるが、この宗教には「教典」なるものは存在しない。まことに不思議な事ではあるが、神道は、教典が不在でも歴史として継続してきているのである。しかも、日本は、かつてはアジアの諸国を侵略し神道を押しつけるようと試みたが失敗した。神道は普遍的な世界宗教には成り得なかった。神道は、天皇制と密接な関係があったからである。

さて、世界の主なる宗教団体と信徒数は、オックスフォードの『世界キリスト教百科辞典』によると、キリスト教徒は32.8%、イスラム教徒16.5%、ヒンズー教と徒13.3%、仏教徒6.3%、ユダヤ教徒0.4%、儒教徒は0.1%である。本論は、聖書の「正典」成立の歴史的経緯を考察することにあるが、ついでながら、日本の代表的な二大宗教である仏教と神道の概要にも触れておきたい。

二. 日本の二大宗教

宗教は、その民族の生活様式・伝統・言語など

を形成する文化の一要素である。従って宗教という言葉から受けるイメージは、その人の立場と信仰によって異なり、その内容も多様とならざるを得ない。広辞苑の宗教欄には「神または何らかの超越的絶対者、或いは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なるものに関する信仰・行事。また、それらの連関的体系。帰依者は精神的共同体を営む」と記されている。

文化庁では、統計の整理上、宗教団体を神道系、仏教系、キリスト教系、諸教の四系統を設けている。包括法人数は421で、このうち文部大臣所轄は377法人である。単位法人は、18万余である。この区分を、神道系が神社神道系、教派神道系(黒住教・神道修成派・出雲大社教・扶桑教・実行教・神道大成教・神習教・御獄教・神道大教・神理教・禊教・金光教・天理教)、新教派神道系それに、皇室神道である。仏教系が天台系、真言系、浄土系、禅系、日蓮系、奈良仏教系、その他の七種。キリスト教系は旧教、新教の二種である。文化庁が昭和52年12月31日に纏めた宗教法人数は神道系が145法人、仏教系159法人、キリスト教系44法人、諸教29法人である。⁽²⁾文化庁刊行の『宗教年鑑』

(1997年版)による信徒数は仏教系89,033,804人、神道系118,384,233人で、この二法人の信徒数は日本の総人口のほぼ2倍である。もっともこの数は、仏式葬式と神社に参拝した人数から算出したものであるから正確な数ではない。神社本庁による1997年(平成9年)1月の調査による神道の信者数は人口の3.8%であった。これが、実状であろう。この信徒数からいみじくも、日本人の信仰のあり方を伺い知ることが出来よう。それは、多重信仰である。日常生活の中での神社との関わりは、七五三・初詣・結婚式・地鎮祭などである。仏教との関わりは、葬式・お盆の墓参・仏壇を設置することなどであろうか。

1. 神道

(1) 教典

神道については体系的な神学がないので、以下、神道の、手引き書から断片的に引用して本質を探ることにする。「神道は、日本に生まれた民族宗教であって作られたものではない。日本という風土に生まれ育った、日本人と共に出現したのが神道

である」。⁽³⁾

「神道は、作られた宗教ではないから、教典はない。あるとすれば、それは自然、しかも日本という風土と気候よりなる自然である。しかし、何か書かれたものに寄り懸かりたいという気持ちがあるから、強いていえば、古事記・日本書紀・古語拾遺である。記・紀などには、神話の部分と歴史があるが、歴史は一つの精神の系譜を表すから、歴史と神話がつながっても一向に構わない。むしろ、我々の祖先は神だと考えることが、祖霊信仰に最もなじむものである」。⁽⁴⁾

(2) 教えの趣旨。

「神道は、教典があるわけではないので、自然から学ぶ。自然（親神様）の命ずるままに生活を具現するわけだから、考え方が不自然になり、つまり罪穢れの状態になれば、ただちに禊ぎ祓えをして、自然に戻ることが大切である。自然をじっと見つめあるがままを、あるがままとして見る自然科学の認識そのままであり、相矛盾するものではない。ただ、感性の問題として、山や川や動植物やありとあらゆるものに神を見、八百万の神々の存在を認めることになる。人間は自然の一部であり、自然を親として生かされている。自然を破壊することは親殺しにつながる。我々個人の存在は、親の存在、祖先の存在なしにはあり得ない。我々の存在は先祖から子孫へつなぐ一コマである。従って、神道の信仰の根本は祖霊信仰という事にならざるを得ない」。⁽⁵⁾

更に、この世界は、天地創造としてできあがったのではなく、「古事記の冒頭に、自然発生的表現で書かれているが、自然科学的認識となんら変わりなく、古代の人々がいかによく自然を観察していたかが分かる」。⁽⁶⁾「神道は自然と共に今一つ伝統を大切に。その象徴が万世一系の天皇である。我々は、天皇を戴き天皇制を護持することによって、逆に護られている面をもっている」。⁽⁷⁾

(3) 戒律

神道には成文化された教典はない。古事記や日本書紀などは神道古典・神道文献と呼ばれ、神道を学ぶ上で最大の典拠となる書物であるが、教典ではない。従って、戒律というものも、成文化さ

れたものとしては存在しない。神道の重要な行事は「祭り」である。これは神道的実践の修行でもある。⁽⁸⁾「祭り」は神と人との出会い、和樂し、それにより生活を正常なものとして生成発展させてゆくものである。神と人との出会う条件が必要である。条件とは「礼」と「清浄」である。

(4) 礼 拝

神道の礼拝の対象は「神体」と呼ばれるものである。神体とは、「神そのものの実体をいうのではなく、『御霊代』とも称するように、神の鎮まる依代である。即ち、樹木・岩石・山岳などのほか、島・洞窟・滝などの自然物がしばしば神の神体として祭祀の対象となっているが、古くはこれらは神そのものと考えられていたのであろう。また、社殿の発達とも関連しつつ、人工的物件(工芸品・貴重品)が御霊代とされるようになる。鏡・剣・玉類などが神体とされる事例がこれである。神社に奉斎される神体は、神秘のこととして被見、口伝もしないのが原則とされている。伊勢神宮の神体は天岩戸の段に見える八咫鏡であり、天照大神から伝えられたものである。熱田神宮に奉斎されているのは、草薙剣である。実在人物を祭神とする神社では、ゆかりの遺品を神体とする。萩の松陰神社は（祭神吉田松陰）硯が祀られている」。⁽⁹⁾

礼拝の仕方は、「二拝二拍子一拝」である。「拝」と「拍子」が神道の拝礼作法の特色である。さらに、正式の拝礼においては、玉串を奉納される。これは、神に捧げる真心の表象である。⁽¹⁰⁾

2. 仏 教

(1) 起 源

仏教はゴータマ・ブッダがブッダガヤーの菩提樹のもとで宇宙の理法を自覚してブッダ（覚者）となり、開祖（仏）・教え（法）・教団（僧）が形成して仏教が成立した。さらに、発祥の地インドにおいて部派仏教の時代・大乘仏教の時代（初期・中期・後期）を経て、さらに中国・日本・チベットなどさまざまな地に伝えられて発展し、多くの学派・宗派が生じた。従ってその教義も多岐にわたり、一概に論じることは難しい。仏教はもともと仏教以前のインド諸思想の影響のもとで成立した宗教であり、業・苦・輪廻・解脱などの説は、

古来のインド思想—インドの人生観は「輪廻」であり、輪廻から脱出することを「解脱」というが、仏教もこの思想と同じ輪廻を前提とし、解脱を目標とする—を継承しながら、仏教独自の教義を完成させた宗教である。

(2) 思想

仏教を他の諸宗教と区別するときの基準とされるのが三法印である。法印とは、仏教の「しるし」という意味で、一切の存在は「苦」(一切苦)であり、「無情」(諸業無情)、「無我」(諸法無我)と見ることである。後に、「涅槃寂靜」が加えられる。すべてのものが無情であり、無我(実体を持たない)であるのは、全てのものが一定の原因と条件のもとに存在しているという事(縁起)によるものであり、無情なものを常として執着するところに人生の「苦」が生じる。

仏教はこの「苦」の原因を追求し、それが人間の欲望(渴愛・煩惱)に基づくことを明らかにし、どのようにしたら欲望を減することができるかを解き、それが完全に滅した状態(これを涅槃という)を目標とするのが人生である。⁽¹¹⁾

仏教聖典の中でブッダによって解かれたのは、「経」と「律」である。その他に、その解釈と研究がある。これらの経律論を合わせた叢書が『三蔵』である。日本で成立した真言宗は『大日経』を、浄土宗と浄土真宗は『阿弥陀経』、禅宗系は『般若心経』『金剛般若心経』を根本聖典としている。

(3) 仏教伝来

仏教の日本への伝来は552年(欽明朝13年)と言われている。これは『日本書紀』及び『扶桑略記』・『一代要記』に明記されているからである。⁽¹²⁾『日本書紀』に、「欽明13年冬10月、百済の聖明王、西部姫氏達怒り 斯至契等を遣し、釈迦仏の金剛像一軀、幡蓋若干、経論若干巻を献る」と記されている。⁽¹³⁾

① 奈良時代の仏教

奈良時代の仏教宗派を南都六宗という。三輪・成実・法相・俱舎・華嚴・律である。六宗は、欽明朝から推古朝にわたって朝鮮から伝えられた。聖徳太子は三論宗であり、真言宗の開祖空海(774

年-921年)も三論宗の系統で学び、高野山に金剛峰寺を建てた。『三蔵』を用いた宗派を言えば、華嚴宗は『経』、三論宗・成実宗・法相宗・俱舎宗は『論』、律宗は『律』を基本的教典とした。天台宗の開祖最澄(767年-822年)は、東大寺で鑑真の伝えた『法華幻義』の影響を受け、比叡山に延暦寺を創設した。

② 念仏宗・浄土宗・浄土真宗

念仏とは「南無阿弥陀仏」で、日蓮宗の題目とは「南無妙法蓮華経」と唱えることである。「南無」というのは、「願」という意味である。「阿弥陀様、お願いします」という意味である。

融通念仏の開祖は良忍(1072年-1132年)である。彼は生死の解脱の難きに悩み、『法華経』・『華嚴教』を熟読し、「一人一切人、一切人一人、一行一切行、是名他力往生、十界一念、融通念仏、億百万遍、功德円満」という示誨を蒙ったと言う。

浄土宗の開祖は法然(1133年-1211年)である。彼は、生死を離れ仏果を証する道は阿弥陀の名号に限るという信仰に達し、浄土宗を開立した。浄土宗は、『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀教』といういわゆる、浄土三部経を所依とする。法然は一日に一万遍念仏を唱える事に依って成仏すると教えた。『選択本願念仏集』

浄土真宗の開祖親鸞(1173年-1262年)は、阿弥陀仏の本願を信じ一念仏によって、凡夫のまま速やかに報土に往生することを教えた。『教行証文類』

③ 鎌倉時代(禅宗・日蓮宗)

鎌倉時代の新興仏教と言われたのは、禅宗と日蓮宗である。

禅宗は臨済宗・曹洞宗・普化宗である。臨済宗の開祖栄西(1141年-1213年)は、博多に日本最初の禅寺聖福寺を建て、次いで鎌倉の源頼家・政子を帰依させ、寿福寺を建て、京都に建仁寺を建てた。「喝」を入れるのが特徴である。『興禅護国論』

曹洞宗の開祖は、道元(1200年-1253年)である。曹洞宗は黙照禅とも言われ、黙々として非思量三昧に打座することを特徴としている。『普勧坐禅儀』

普化宗は唐の普化を祖とする臨済宗の一派である。この派の流儀は虚無僧といって、一鐸を振り、尺八を吹いて修行する。

日蓮宗の開祖日蓮は(1222年-1282年)釋迦の真意は「法華經」にあると考え、これだけを真実經とし他を方便權經として退けた。「南無妙法蓮華經」と題目を唱えるのが特徴である。『立正安国論』。『本山は身延山久遠寺。』⁽¹⁴⁾

日本の二大宗教と言われる神道と日本に伝来し日本の土壌で成立した奈良時代から鎌倉時代までの代表的な仏教を取り上げた。これらは、我々の周辺に観ることの出来る宗教なので常識として知っておいて良いと思う。

三. キリスト教

1. 起源

キリスト教は、イエス・キリスト(紀元0年?-33年)によって発生したが、彼を開祖とは言わない。「救い主イエス・キリスト」と言う。本当の開祖(?)は、ヘブライ語で『ヤーウエ』と言い、「わたしはある」という意味を持つ神である。ヤーウエという神名は、旧約聖書で6823回使用されている。キリスト教は、イエスという人物が、或る日突然歴史に登場して発生したというものではない。それ以前の、イスラエル民族の歴史において、神による長い「準備の時」があった。即ち、天地創造の初めら、アブラハム・イサク・ヤコブというイスラエル族長の信仰、モーセの律法、預言者の教え、祭司による祭儀など、イエスの出現の時までの長い準備の歴史があったのである。キリストが現れるまでのイスラエル民族の宗教は、ユダヤ教である。キリスト教はユダヤ教を母体としている。後に発生したイスラム教の母体もユダヤ教である。母体とは、イスラエル民族の信仰の「父」と言われた「アブラハム」は、キリスト教とイスラム教においても信仰の「父」として敬愛されているからである。勿論、モーセの律法も三大宗教共通の戒めである。

イエスはベツレヘムで生まれ、ナザレで青年時代を過ごし、およそ30歳の時に伝道を始めた。その内容は説教と愛の行為に大別される。即ち、神の国について譬えで語り、病人を癒し、虐げられ

た人々を励ました。しかし、彼は当時のユダヤ教体制から排除され、遂に十字架に処せられた。その十字架上でイエスは、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ福音書23章34節)と言い、敵をも愛する愛を示された。そして三日目に復活し、死の克服と永遠の生命のあることを示されたのである。

2. 聖書

キリスト教の教典は聖書である。しかし、教典とは言わず正典と言う。正典(カノン)とは、ナイル川に生育する「葦の茎」から由来した概念である。「葦の茎」は一定の長さを持っていたので、そこから「定規」として用いられ、成否の標準となる「規範」・「基準」などの意味を示すようになった。キリスト教の発生当時から、信仰の正否をめぐる闘いが続いた。パウロの手紙は、キリスト教の正当性を主張するために書かれた文書とも言えるのである。例えば、ガラテヤの信徒への手紙はその典型であろう。「キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果ててます。ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎないのです」(1章6-7節)。新約聖書はキリスト教を伝える文書であるが、同時に、異端との闘いの中で生まれた書物とも言えるのである。

3. ユダヤ教における旧約文書の正典成立

ヘブライ語の旧約聖書は、「律法」・「預言者」・「諸書」という三部から成立している。正典の基準は次の三点である。

- ①ユダヤ教における律法の権威は絶大で、律法以外の文書の資格を検定する基準は律法である。従って、律法の教訓と一致するものが正典とされた。
- ②ヘブライ語で書かれた文書であること。
- ③ユダヤの歴史家ヨセフスの見解は、モーセからペルシャ王アルタクセルセスの治世(B.C.465~424)までの間に書かれたものであり、

かつ靈感によって書かれた文書を正典とした。しかし、アレキサンドリア＜エジプトのアレキサンドリアで旧約聖書のヘブライ語からギリシャ語への翻訳作業が行われた場所＞においては、神の靈感は時代によって制限されるものではなく、すべての敬虔で高德な智者賢人は神の靈感を受けるという基準を示した。従って、すべての人を教え、その徳を建てる目的に適合するものは、神聖なる文書としてヘブル正典と同様に扱うべきとした。しかし、律法だけは他の文書以上に権威あるものとされた。⁽¹⁵⁾

i 律法（トーラー）

律法とは旧約聖書の最初の5巻、創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記の文書で、モーセ五書とも言う。モーセ五書は天地創造から始まって、イスラエル民族の父祖アブラハム・イサク・ヤコブと契約を結び、モーセに律法を授け、モーセの死で終わるイスラエル民族の成立前史でもある。尤も正確に言えば、創世記は律法についての叙述はない。²⁾ 律法の中心はモーセがシナイ山で神から授与された「十戒」である（出エジプト記20章）。五書は捕囚時代(B.C.589～537)バビロンにおいて編纂され、B.C.444年(又は397年)エズラ律法公布（ネヘミヤ記8章）に依って、正典として公認された。律法の総数は613である。

ii 予言者（ネビーム）

予言者は「前予言者」と「後予言者」も二つに分かれ、「前予言者」はヨシュア記・士師記・サムエル記上下・列王記上下である。これらはいずれも歴史書である。即ち、モーセの死後から、ヘブル王国の滅亡までの歴史を記したものである。これらの歴史的文書も律法の書と共に捕囚時代にバビロンにおいて編纂され、予言者の歴史的背景を示し、神的権威を有するものと認められ正典とされた。

「後予言者」はイザヤ書・エレミヤ書・エゼキエル書・12小預言書（ホセア書・ヨエル書・アモス書・オバデヤ書・ヨナ書・ミカ書・ナホム書・ハバクク書・ゼファニア書・ハガイ書・ゼカリヤ書・マラキ書）である。これらの大部分は、紀元前5

世紀には既に存在しており、いずれもその著者が神から直接靈感を受けて書かれたものである。「万軍の主がその霊によって、先の預言者たちを通して与えられた律法と言葉」(ゼカリヤ書7章12節)。「預言書」全体が正典とされたのは、B.C.165年頃である。⁽¹⁶⁾

iii 諸書（ケスービーム）

諸書とは「律法」と「諸書」からもれたもの、またはその後書かれたものを集めたものである。歴代誌上下・エズラ記・ネヘミヤ記・エステル記・ヨブ記・詩篇・箴言・コヘレトの言葉・雅歌・哀歌・ダニエル書の11巻である。これらの文書が正典として認められたのは、紀元1世紀の終わり、パレスチナのヤムニヤで開かれたラビの会議においてである。

4. キリスト教における新約文書の成立

キリスト教とイスラム教の母体はユダヤ教であるが、共通点は旧約書を共有しているからである。では、三宗教の相違点は何処にあるのだろうか。ユダヤ教はタルムードを、イスラム教はコーランを、キリスト教は新約聖書という教典をそれぞれ別に保持しているのである。更に、旧約で予告され待望されていた「メシア」を、キリスト教では「イエス」を、イスラム教では「マホメット」を、そしてユダヤ教では、未だ来たらずとしているのである。新約聖書のヨハネ福音書の中に次のような記述がある。「ヨハネは牢の中で、キリストのなさったことを聞いた。そこで自分の弟子たちを送って、尋ねさせた。『来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。』(11章2～3節)。この問いに対する回答が新約聖書全体の課題と言っても過言ではない。

(1) 新約聖書

① パウロの書簡

i 律法について

新約聖書の配列は福音書から始まり、使徒言行録、パウロ書簡となっているが、年代的から言えば、パウロの手紙が最も早い。マルコ福音書は70年頃の文書であるのに対し、テサロニケの信徒への手紙は50年の夏頃と言われている。

パウロは、彼自身が証言しているように熱心なユダヤ教徒であった。「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤ民族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした」(フィリピの信徒への手紙3章5～6節)。ユダヤ教の熱心なパウロが、後にキリスト教徒へと改宗するのである。その経緯は「使徒言行録」9章に記されている。この文書は、パウロの弟子ルカの執筆である。又、パウロ自身、「ガラテヤの信徒への手紙」で、改宗の経緯について言及している(1章～2章)。それによると、パウロの回心の動機は、イエス・キリストとの劇的な出会いであった。「サウロ(パウロ)はなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の回りを照らした。サウロは地に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。』」(言行録9章1～6節)。

ユダヤ教の信徒だったパウロにとって、最大の関心事は「律法」である。ユダヤ教の中心は「律法」だからである。彼は、先ず「ローマの信徒への手紙」で、「信仰の義」という主題で取り上げる。ユダヤ教徒においては「律法」に従順である事が「義」とされたのであった。パウロの表現を用いれば、「行いによる義」である。だがパウロは、「律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないのです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです」(3章20節)と言い、行いによるのではなく「イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です」(3章22節)、即ち、「信仰による義」を主張し、自説の根拠として、信仰の父といわれた「アブラハム」を持ち出すのである。「では、肉によるわた

したちの先祖アブラハムは何を得たと言うべきでしょうか。もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。聖書には何と書いてありますか。『アブラハムは神を信じた。それが、神の義と認められた』とあります」(4章1～3節)。ここで引用した「聖書」とは言うまでもなく旧約聖書のことであり、「創世記」15章6節に記述されている。パウロは信仰の義について、「ガラテヤの信徒への手紙」においても述べている。例えば、「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです」(2章16節以下)。「フィリピの信徒への手紙」でパウロは律法について、「わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失とみなすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それを塵あくと見なしています」(3章7節)とまで言い切るのである。パウロにとって、かつては「律法」が「主」であったが、今や、「イエス」が「主」(キリスト)となったのである。それでは、律法は神の約束に反するものなのだろうか。パウロはこの疑問にたして、次のように答える。「信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません」(ガラテヤの信徒への手紙3章23節以下)。彼は律法は、キリストへ導く養育係だったと言う解釈を示して、その位置づけをしたのである。

だからと言って、パウロは律法を全面的に否定したのではない。彼は次の一点を強調する。即ち、「律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全うされるからです」(ガラテ

ヤ5章14節)及び、「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです」(ガラテヤ6章2節)と。パウロにとって今や、最大の関心事は「他者感覚」である。ユダヤ教徒においては、律法規定をどれだけ遵守できるかが、義人の条件だったが、そこには他者・隣人への感覚が入っていなかった。「安息日」には、病人の治療さえ禁じられていた。イエスが処刑された理由は、「安息日」規定に違反したからである(マルコ3章1～6節)。かつてのパウロは「律法の義については非のうちどころのない者でした」(フィリピ3章6節)と述べているほどだ。そこには、「隣人」の存在は、眼中になかった。キリスト教徒に改宗したパウロにとって、「律法」実行は、「隣人」に対する「愛」の業が中心となったのである。その典型的な例証は、コリントの信徒への手紙一13章に見ることが出来る。曰く、「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」。

パウロの功績は、キリスト教とユダヤ教信仰の中心概念である「義」と「律法」の問題を、神学的に明らかにしたことにある。

ii パウロの旧約聖書の受容

パウロはユダヤ教からキリスト教へと改宗し、律法について「信仰による義」という解釈を提示して弁明したが、「旧約聖書」の受容の方法はどうだろうか。

彼はユダヤ教諸派の人々とは根本的に異なる視点から旧約聖書を読むのである。それは「キリスト」から読むということである。即ち、キリストへの信仰の光に照らして、聖書を読むのである。パウロは「神の約束は、ことごとくこの方において『然り』となったからです」(コリント二1章20節)と述べ、キリストへの信仰のないところでは「今日に至るまでモーセの書が読まれるときは、いつでも彼らの心には覆いが掛かっています。しかし主の方に向き直れば、覆いは取り去られます」(コリント二3章15節)と。

パウロの功績は、旧約聖書全体をキリストの視点から、キリストの光に照らして、キリスト証言の福音の書としたことである。この方法は、後の旧約聖書の正典史に決定的な影響を与えることに

なるのである。

② 福音書

i マルコ

四福音書の中で最初に書かれたのはマルコである。マルコによる福音書は、ユダヤ人ではなく、ギリシャ人やローマ人、即ち、異邦人を対象にしているのが特徴である。従って「律法」の受け止め方は、パウロとは違う。マルコによるイエスの言動は、安息日や清浄に関する規定には拘束されない。例えば、安息日に弟子たちが麦の穂を摘み始めると、ファリサイ派の人々がそれを咎めた。すると、イエスは弟子たちを弁護して「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」(マルコ2章23節以下)と語られ、3章では安息日に「手の萎えた人を癒し」、7章では「昔の言い伝え」を固執するファリサイ派と律法学者に対して預言者イザヤの言葉を引用して「この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間の戒めを教えとしておしえ、むなしくわたしをあがめている」と。

さらに、離婚に関するモーセの規定についてもイエスは反対の立場を表明する。ファリサイ派の人々が「夫が妻を離婚することは、律法に適っているでしょうか」と尋ねた。イエスは「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」(10章9節)。人間の行為を規定するのは律法の個々の戒めではなく、「地上で罪を赦す権威を持ち」(2章10節)、「安息日の主である」(2章28節)人の子イエスである。

しかし、マルコ福音書は律法を破棄するわけではない。律法学者との論争で、最も重要な掟として申命記6章4節とレビ記を引用する。「聞け、イスラエルよ、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」(12章29節)及び「隣人を自分のように愛しなさい。この二つにまさる掟はほかにない」(レビ記19章18節)。マルコ福音書はパウロと同様に、キリスト教徒は個々の律法規定からは自由であることを主張しつつ、旧約聖書の律法を採用する。この援用の仕方は後のキリスト教会にも適用される。「福音と律法」という逆説の併用である。しか

し、「福音」主義を旗印としているプロテスタント教会における個々の「律法」適用の範囲は困難である。精々、「十戒」と前掲の戒め程度だろうか。カトリック教会は、厳密な教会規定（法）を保持して、「懺悔」を制度化をするが、福音主義（プロテスタント）は、教派によって異なる。

ii マタイ

マタイによる福音書は、ユダヤ人を対象とした文書で次の二点に特徴がある。先ず、マルコとは異なり、律法問題はきわめて深刻であった。イエスは、律法学者とファリサイ人と徹底的に対決する。「律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座に着いている。だから彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見倣ってはならない。言うだけで実行しないからである。彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない…」(23章1節以下)。しかし、マタイ福音書は、律法主義者と対決するが「律法」を否定するわけではない。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」(5章17節以下)。

かくして、マタイ福音書は山上の説教(5章～7章)において、律法の新しい解釈を提示する。「腹を立ててはならない」「姦通してはならない」「離縁してはならない」「誓ってはならない」「復讐してはならない」「敵を愛しなさい」「天に富を積みなさい」「人を裁くな」などである。マタイは律法主義者に優る義を要求するのである。

マタイの特徴の第二は、イエスの生涯の個々の出来事が、旧約聖書の預言の成就である事を強調する。即ち、「このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」(1章22節)という定型句が13回も引用されている。マタイは、旧約聖書の預言者の言葉を引用して、イエスの出来事は悉く神の救済計画の実現にほかならない事をユダヤ人に対して述べ、キリスト教の正当性を主張した。

iii ルカ

ルカによる福音書は80年代に書かれた文書である。ルカはその後、使徒言行録も著わしている。聖書の執筆者は当然殆どユダヤ人であるが、ルカはマケドニア人(ギリシャ)で、医者を本職とし、歴史家であったと言われている。また、伝説によると、画家でもあって、その絵画はトルコで見ることが出来ると言う。ルカ福音書の特徴は異邦人(非ユダヤ人)を対象にして書かれた文書である。従って、律法遵守は、マタイ程深刻ではない。「多くの病人をいやす」(4章38節)イエス像にルカの関心があった。さらに、他の福音書と異なり、ルカ福音書はイエス誕生以前のユダヤ人たちの物語で書き始め、使徒言行録と共に歴史的な叙述文書と言う形体をとっている。即ち、ルカはキリスト教を、ユダヤ人の歴史から世界史的な経路へと展開しているのである。別言すれば、救済史展開を叙述していると言ってよい。

イエスの誕生は、「万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです」(2章31節)で、神の約束の成就であった。成人したイエスはガリラヤで伝道を開始し、ナザレの会堂でイザヤ書を朗読された。「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目に見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」(4章16節以下)。このイザヤ書を引用した点にルカの特質を知ることができよう。イエスの福音は、貧しい人・捕らわれている人・目の見えない人・圧迫されている人々に向けられている。「心の貧しい人々」(マタイ5章3節)という表現がマタイで使われているが、ルカでは単に「貧しい人々」(6章20節)と言う。ルカは「貧しいやもめ」のレプトン銅貨二枚の献金を称賛(21章1節)し、金持ちを「愚か者」(12章13節・16章19節)と警告する。これらの視点がすでに、福音の普遍化と言えよう。ルカは使徒言行録において、福音がユダヤ人からギリシャ・ローマへと伝えられていく経緯を述べる。

その決定的な第一歩は、イタリアの百人隊長コルネリウスと彼の家族及び友人たちの受洗である

(10章)。「あなたがたもご存じのとおり、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられています。けれども、神はわたしに、どんな人をも清くない者とか、汚れている者とか言うてはならないと、お示しになりました。…ペトロがこれらのことをなおも話し続けていると、御言葉を聞いている一同に聖霊が降った」(10章28節以下)。異邦人伝道のパイニアはパウロではなく、ペトロが用いられたのである。ところが、異邦人の教会で、律法を巡る紛争がおきたのである。

「ある人々がユダヤから下って来て、モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない、と兄弟たちに教えていた。それで、パウロやバルナバとその人たちとの間に、激しい論争が生じた」(15章)わけである。そこでパウロやバルナバは、この問題を協議するためにエルサレムへ出掛けた。このエルサレムにおける使徒会議が第一回目の世界会議と後に言われたのである。ペテロは、異邦人にも聖霊が降った出来事を、この使徒会議で報告し、「先祖もわたしたちも負いきれなかった軛を、あの弟子たちの首に懸けて、神を試みようとするのか」と語りかけた(15章7節以下)。結局、使徒会議で次の四つの規定が異邦人に課せられた。「偶像に供えて汚れた肉と、みだらな行いと、絞め殺した動物の肉と、血とを避けること」(15章20節)である。こうして、異邦人キリスト教徒は律法から自由であることが認められた。勿論、今日のキリスト教会はあの四つの規定さえ、問題としていない。しかし、エホバの証人という新興宗教団体は、「血」の規定を最も大切な戒めとしている。つまり、「輸血」を拒否するのである。モーセの律法を、今も尚受け入れているユダヤ教徒とイスラム教徒は、「血抜き」の肉でなければ、食してはならないのである。数千年も通しての律法遵守は見事というほかない。

iv ヨハネ

ヨハネによる福音書は100年前後にシリア或るいは小アジアで成立した文書である。ヨハネ福音書は律法による生活態度には関心が無い。問題の中心は「言が肉となった」、「イエスは世の光」(8章12節)・「道・真理・命」(14章6節)であるとい

うキリスト論である。律法は重視されないが、イエスの出来事は旧約聖書によって証明される。「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。モーセは、わたしについて書いているからである」⁽¹³⁾(5章39節以下)。イエスがロバの子に乗ってエルサレムに入場する場面では、「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、ろばの子に乗って」(12章15節)と、ゼカリヤ書9章を引用し、イエスの衣服を兵士が分け合う場面では、「彼らはわたしの服を分け合い、わたしの衣服のことでくじを引いた。という聖書の言葉が実現するためであった」(19章15節)と、「渴く」も詩編22からの引用である。「彼らは、自分たちの突き刺した者を見る」(19章37節)は、ゼカリヤ書12章10節からである。

旧約聖書をキリストから読む、これがヨハネ福音書の意図するものである。従って、旧約聖書はキリスト預言的言辞のゆえに意味を持つにすぎない。ヨハネの関心は徹底してキリストにおける神の啓示と救済の絶対性に集中している。

四. 聖書の正典成立への経緯

1 異端の系譜

新約聖書には27巻の文書が納められているが、これらの文書が直ちにキリスト教の正典として公認されたわけではない。新約聖書の内容は、福音書・使徒言行録・パウロ書簡・公同書簡・ヨハネの黙示録と大別されるが、新約聖書27巻が、キリスト教の「正典」として決定されたのは、通説では、397年の第三回カルタゴ会議においてである⁽¹⁷⁾。2世紀から4世紀にかけて多くの護教家(使徒後教父)⁽¹⁸⁾がキリスト教文書を著わしてきた。また、同時代に、グノーシス主義、マルキオン派、ユダヤ人キリスト派、ナグ・ハマデイのコプト語写本など後に異端として正統派から排斥された文書も著された。その中で、「正典」からはずされた文書を「外典」(アポクリファ)又は「偽典」と言う。「正典」の基準の一つは、「ニカイア・コンスタンチノポリス信条」(381年)⁽¹⁹⁾の告白との合致である。オリゲネスは、正典・偽典として扱われる文書を次のように分けた。

- ①. すべての教会によって「認められているもの」又は、「反対意見のないもの」
- ②. 議論のあるもの」＜「ヘブライ人への手紙」は正典＞
- ③. 真正でないもの。使徒の名で書かれているが偽作。これは「偽典」

異端呼ばわりされた人々も後の「正典」成立に貢献したと言ってもよい。「異端から正典がはじまった」⁽²⁰⁾と言う批評は正解である。それ故に、異端の文書を先ず考察し、次に護教家の文書を取り上げる。

(1) グノーシス派

新約聖書の内容が現在の27の文書に限定されていく中で異端とされた、グノーシス主義とマルキオン派及びナグ・ハマデイの文書は次の通りである。これらの大部分は、2～4世紀に成立した。以下、「外典」諸文書を挙げる。外典諸文書の分類は、荒井献編『新約聖書外典』⁽²¹⁾及び『隠されたイエス』⁽²²⁾による。

表示に用いられている記号は次の通りである。

- G グノーシス主義
J ユダヤ人キリスト教
M マルキオン派
NH ナグ・ハマデイ 写本<1945年、ナイル河畔で発見された文書>

① 福音書

ナザレ福音書J, エピオン人福音J, ヘブル人福音書, エジプト人福音書・ペトロ福音書・ニコデモ福音書・トマス福音書G (NH), マッテア福音書・三部の教えG (NH), ユダ福音書G, ヨハネのアポクリュフォンG (NH), ヤコブのアポクリュフォンG (NH), マリアの質問G, マリアの福音書G, マリアの「ゲンナ」・ケリントス福音書G, バシリデス福音書G, 使徒たちの書簡・イエス・キリストのソフィアG (NH), 救い主の対話G (NH), ピステイス・ソフィアG, イエウの二つの書

G, ピリポ福音書G (NH), 闘技者トマスの書G (NH), マルキオン福音書M, シルパノスの教えNH, アベレス福音書M, バルサネス福音書G, マニ福音書G, ヤコブの原福音書・トマスによるイエスの幼児物語・アブガルとイエスの往復書簡G

② 使徒行伝

ペトロ行伝・パウロ行伝・ヨハネ行伝G, アンデレ行伝G, トマス行伝G, ペトロと十二使徒行伝NH

③ 書簡

ラオデキア人への手紙・セネカとパウロの往復書簡・テトスの手紙G (NH), ヤコブのアポクリフォンG (NH), 復活に関する教えG (NH), ピリポに送ったペトロの教えG (NH), レギノスへの手紙G (NH)

④ 黙示録

イザヤの殉教と昇天・ペテロの黙示録・パウロ黙示録・トマス黙示録・エルケサイ黙示録J, シビュラの託宣・コプト語パウロ黙示録G (NH), ヤコブ黙示録 (I) G (NH), ヤコブ黙示録 (II) G (NH), アダム黙示録G (NH), コプト語ペテロ黙示録G (NH)

⑤ 詩歌

ナハシユ派の詩篇G, ソロモンの頌歌G

⑥ 祈禱

使徒パウロの祈りG (NH)

⑦ 教え

ペテロの宣教・ペテロの宣教集J, 真理の福音G (NH), 大なるセツの第二の教えG (NH), アルコーンの本質G (NH), メルキセ

デスG (NH) この世の起源についてG (NH), 真理の証言G (NH), 魂の解明G (NH), グノーシスの解釈G (NH), 聖なるエイグノストスG (NH), ヴァレンティノスの解明G (NH), 真正な教えG (NH), 三体のプロテンノイアG (NH), われらの大なる力の概念G (NH)

以上表示した「外典」諸文書は合計74であり、このうち、グノーシス主義の「外典」は42である。グノーシス主義とは、「人間の本来的自己と、宇宙を否定的に超えた究極的存在（至高者）とが、本質的に同一であるという認識を救済とみなす宗教思想のことである」⁷⁾。これは必然的に、至高者と人間の間であって人間の救いを仲介する、救済手段としての媒介者を認めない。正統的キリスト教は、イエス・キリストを神と人間との仲介者・和解者と信ずることから、この思想を異端とした。

(2) マルキオン (85/90年～160年以前)

マルキオンはグノーシス派とは一線を隔する。彼の思想は、パウロの教説を一面的に強調し、旧約的律法とユダヤ教を排撃して、創造者と真の救主イエスの父なる神とを二元的に区別し、キリスト仮現説(Doketismus)を説いてその死を否定した。これが一般的な理解である。⁽²³⁾しかし、角度を変えてみると、マルキオンはパウロ書簡の「正典」成立に重要な貢献をしているのである⁹⁾。彼の意図は、ヘレニズム化されたユダヤ人への宣教という、新約文書成立期に抱えていた問題の中で、「福音の再ユダヤ化」を矯正しようとした事にある。その方法は徹底していた。

先ず、彼はキリストの顕現と旧約の歴史との連続性を認めない。「キリストはテイベリウス帝位15年に、ガリラヤの町カペナウムに突然下降し、その会堂で教えはじめた」という書き出しでマルキオンの福音書は始まっている⁽²⁴⁾。キリストは律法、預言に予告されることなく突然現れた、というのが彼の思想である。従って、キリストと創造神、キリストと旧約の歴史との間には、いかなる関係も連続性も認めない。預言とその成就という関係も否定する。それは福音からの逸脱であり、

福音の「再ユダヤ化」なのである。

彼は、パウロこそ、神の恩恵と愛を啓示によって受けた唯一の使徒、それを純粹に宣教した使徒であるという。パウロをないがしろにする教会の現状は、ユダヤ教への逆行であり、キリストの福音の真理からの逸脱である。この攻撃から福音を復権し、雑多なユダヤ教伝承から「福音の真理」を純化することが、彼の課題と考えたのである。マルキオンの正典作成の基本は、旧約聖書拒否とパウロ主義の二点である。

マルキオンの時代には、当然ながら、新約聖書の「正典」概念はまだ確立されていなかった。権威ある文書といえば、旧約聖書だけであり、それ以外にはわずかに『主の語録集』と『使徒たちの回想録』が作られ、礼拝で用いられていたにすぎない。「使徒的文書」(新約文書)は、せいぜい旧約聖書を補足するものとして、漠然と捉えられていただけであった。彼は139～144年にわたって、ローマでパウロの『使徒書』(アポストリコン)と呼ぶ10書簡と『ルカ福音書』を改定した一つの福音書を著した。

① 使徒書(アポストリコン)とは次の10通の手紙である。

「ガラテヤ人への手紙」「コリント人への第一の手紙」「コリント人への第二の手紙」「ローマ人への手紙」「テサロニケ人への第一の手紙」「テサロニケ人への第二の手紙」「ラオデキア人への手紙」(エペソ人への手紙)「コロサイ人への手紙」「ピリピ人への手紙」「ピレモンへの手紙」。

② ルカによる福音書

福音書は「四つ」あるが、彼が何故、「ルカによる福音書」を選んだのだろうか。その理由は、ルカ福音書は比較的マルキオンの要求に合致していたからである。マタイ福音書は、ユダヤ教的色彩が強く、預言の成就が強調されているので拒否された。マルコ福音書は、当時の教会で広域に用いられておらず、「主の言葉」を多く含んでいない。ヨハネ福音書は、古来性と原初性に欠けている。しかし、ルカ福音書は、異邦人キリスト教的性格、恩恵の強調、禁欲的傾向が彼の思想と合致したの

である。

しかし、正統的教会はマルキオンに対して144年、「福音とユダヤ教との対立」および「二神の対立」という、彼の中核を拒否しローマから追放した。それだけではなく、正統的教会はパウロ文書をも排斥しようとしたのである。その理由は、パウロの神学的特徴が、グノーシス主義に思想的基盤を与え、思弁的・世界拒否的・反秩序の勢力に言質を与え、正統的教会にも蔓延してきたからである。即ち、異端はパウロ文書を利用しているという理由からである。テルトゥリアヌスさえ、皮肉っぽく、パウロを「マルキオンの使徒異端者たちの使徒」と呼んでいる。⁽²⁵⁾ こうして、約一世紀の間パウロは事実上失われた存在となり、一般のキリスト教徒はパウロの存在さえ知らなかった。

パウロの復権に貢献したのはポリュカルポス（スミルナの監督・155年頃殉教）である。⁽²⁶⁾ 彼は、パウロを利用する者たちを非難しながらパウロを称賛した。即ち、異端によるパウロ利用を論駁することによって、異端からパウロを取り戻す方法を確立し、パウロを「異端のパウロ」としてではなく、「教会のパウロ」として復権させる道を開いたのである。

このようなパウロ復権の課題は、エイレナイオスに継承された。彼は、『異端反駁』（180-189年）と『使徒的宣教の証明』（189年以後）、『信仰の基準』を著して、パウロの思想をキリスと教神学の中に復権させ、正典理念をほぼ確立したのである。

こうして、福音書とパウロ書簡をセットにして「正典」とするというマルキオンの形式を、やがて、そっくり正統的教会に踏襲されることになる。マルキオンの正典がなければパウロの文書が正典に入っていたかどうか疑問である。マルキオンは新約聖書創成者と言ってよい。それを最初に作成しただけでなく、その理念の創始者でもあったのである。「正統的教会」とか「異端的教会」の判別はその時点では判断できない。それは、歴史が判断することなのであろう。

2. 護教家の系譜

先ず挙げられるのは、ローマ教会監督のクレメンスの『コリント教会に贈る手紙』である。これ

は、第一世紀末コリント教会内の不和を戒めて監督への服従を勧告した文書である。次は、アンティオキアのイグナティオスが110年頃、殉教者としてローマに旅する途中、小アジアから書き送った『七通の手紙』と『ポリュカルポスの殉教』という文書である。両書は共に、熱烈な信仰に燃えた強い感化力を持ち、殉教を勧め、教会の一致を説いている。『ヘルマスの牧者』は、牧者の姿を取って現れた懺悔の天使が教会の弛緩を戒めて改悛を勧めるという趣旨で、幻5章、戒告12章、譬喩12章より成り、教会的生活の肅清訓練を要請した勧告書である。ヘルマスとは、ローマ監督ピウスの兄弟と言われ、140年前後の作である。『十二使徒の教え』は、洗礼・断食・祈禱・聖餐等の行事、使徒・預言者・旅行者等の待遇、日曜日礼拝、監督執事の選挙等の規定を説いている。これは二世紀半ば頃の制度で、シリアまたはパレスチナあたりの慣習を記した書である。

二世紀の中葉に入って、正式に護教家の名に価するはユステイノス、タティアノス、エイレナイオス、テルトゥリアヌスである。彼らによって聖書の「正典」成立への道が整えられたのである。

(1) ユステイノス

ユステイノスの正確な生年は不詳であるが、ローマの町で、163～167年頃に殉教したと言われている。彼は哲学的素養が豊かであったから、キリスト教を知識人およびユダヤ教徒に対して護教する書物を著した。『アントニウス・ピウスとその子及び元老院に呈する弁証論』『ギリシャ人に与える言葉』『神の単一性について』『詩篇』『たましいを論ず』『ユダヤ人トリュプオン』『キリスト教弁証論』『ギリシャ人への駁論』等、合計八篇の書がある。ユステイノスの時代は、所謂「新約聖書」とその権威が確立していなかったから、キリスト教信仰の真理性を弁証してく上での権威は旧約聖書しか存在しなかった。従って、キリスト教徒はただ旧約聖書の権威のみに依って、キリスト教徒たることの正当性を証明しなければならなかった。マルキオンは旧約聖書からイエス・キリストの福音への一切の救済的・啓示史的連続性を拒否したが、これに対してユステイノスは、万物の創造か

ら始まって、やがて実現すべき世界の終末に至るまでの歴史全体を、不変の主体ロゴス・キリストによって貫く「救済史」として把握した。彼は、旧約聖書の規範性を初めて神学的に基礎づけたのである。彼の「七十人訳聖書」の受容は次の通りである。

旧約文書を書かせたのは、神的なロゴス・キリスト、または聖霊である。従って、聖霊は時と場所を超えて不変であるから、旧約文書の破綻と矛盾はあり得ない。彼は又、旧約書を「予言と成就」という解釈をする。それは、イエス・キリストの不変の神性（ロゴス）を前提することから出発して、旧約書をそのロゴスによって語られた矛盾なき予言の書として示し、旧約書をキリスト教の聖書とすることの正当性を論証したのである。

彼は、「七十人約聖書」（旧約聖書）からの引用は、出典文書名を挙げているのに対して、現在の新約正典に収められている文書からの引用文には出典名を示さない。しかも、共観福音書を別にすると、ヨハネ福音書・使徒言行録・パウロ書簡からの引用は皆無なのである。

彼は、原始キリスト教期、キリスト教を宣教するのに旧約聖書以外には何一つ依拠できる『聖書』がなかった時代の最後の代表者と言われている。

(2) タテイアノス

彼の代表作は『デアテッサロン』（四福音書通観）である。この文書の特徴は、ヨハネ福音書の構成に準じていることである。彼は、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネと言う現在の正典四福音書の記事を調和させ、全体を一つの福音書の形式に纏めた。共観福音書中のイエスの言葉については、主に、マタイ福音書の「山上の教え」を枠組みとして構成している。

何故、彼は『デアテッサロン』を著したのだろうか。その理由は、マルキオンとユステノスに対して対抗したのであったと思われる。⁽²⁷⁾ 即ち、マルキオンは既に観たように、マタイ・マルコ・ヨハネ福音書を排除して、ルカ福音書のみを正典とした。また、ユステノスの場合も、ヨハネ福音書を意識的に避けていた。しかし、タテイアノスは、ヨハネ福音書を共観福音書と同じ価値を与え、

四福音書の正典化への道を開いたのである。

(3) エイレナイオス

彼の生年は明確ではないが、セヴエルス帝治下の迫害で202年頃殉教したと言われている。彼の功績は、「七十人訳聖書」（旧約聖書）と四福音書を正典として、しかも四つを一つの統一ある正典として、最初に確立した事である。彼の主著は、『異端反駁』（偽ってそう呼ばれたグノーシスの暴露と反駁のための五巻の書）と、『使徒的宣教の証明』である。

彼は、先ず「七十人訳聖書」の正典性を論証するために次のような伝説を利用した。その伝説とは、エジプト王プトレマイオス二世（前285～246年）が、アレキサンドリアの図書館に収めるため、エルサレムから70人（正確には72人）のユダヤ人の律法学者を呼び寄せて、旧約聖書をヘブライ語からギリシャ語に訳させた時に、王は律法学者たちが申し合わせて故意に誤訳し、ヘブライ語本文の真義を秘匿するかもしれないと懸念した。そこで王は律法学者たちを一人ひとり別にして同じ文書を訳させたが、最後に出来上がった全員の訳文をくらべて見たところ、始めから終わりまですべて同じ単語、同じ表現であったというのである。エイレナイオスはこのような伝説を持ち出して次のように述べる。即ち、このような奇跡的翻訳を成し遂げた主体は、神の「霊」である。その「霊」は今、教会の中に働いている「霊」と同じなのであるから、「七十人訳聖書」は最初から、靈感によって書かれたキリスト教の聖書なのであると。

我々が用いている「旧約聖書」は、ユステノスに依って初めてキリスト教の聖書として獲得された。そして次に、そのギリシャ語訳がエイレナイオスに依って初めてキリスト教の聖書として神学的に根拠づけられたのである。

次に、エイレナイオスが、「福音書」を正統的教会の正典として確定しようとして目指した方法は、次のような方法であった。マルキオンは、「ルカによる福音書」のみを排他的に選んだ。これに対して、タテイアノスは、四福音書を包括して、合成的な福音書を造りあげた。しかし、エイレナイオスは、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという

現在の正典四福音書を排他的に四つに限定し、四つを包括し、しかもその四つをそれぞれの個性において独立することで、一つの全体を確保させたのである。これこそ、本当の意味での「総合」と言ってもよい。

エイレナイオスは「四福音書」を確保しただけではなく、その他の「新約書」の各文書をも確保した。例えば、彼は『異端反駁』の第三巻で正典四福音書と使徒言行録から、第四巻では譬え話を中心とする「主の言葉」から、第五巻ではパウロ書簡を中心とする「使徒的書簡」を頻繁に、意識的に一定の原則に基づいて引用している。また彼は、マルキオンのパウロ書簡(10書簡)に牧会書簡(第二テモテ、テトス)を加えた。この意味で、『異端反駁』は、壮大な規模でなされた新約文書による「聖書証明」となっているのである。キリスト教史の上で、エイレナイオスは「新約聖書」の理念を、またそれと共に「旧約聖書」の理念を確立し、『旧新約聖書』をキリスト教の「正典」として樹立させたのである。

(4) テルトウリアヌス

テルトウリアヌス(150/60～220)はカルタゴで生まれ、ローマに出て弁護士の仕事をしていた。その間にキリスト教に入信し、カルタゴに戻り教会の指導者となったのである。彼は法律家出身に相応しく、聖書の表現に法律用語を転用した。その典型的な例は、旧約文書と新約文書を一つの「纏まりの文書集」(instrumentum)と言う言葉である。その文書集という語を、更に、「testamentum」(契約＝聖書)という言葉に言い換えたのである。また、「新約聖書」の語源である「novum Testamentum」(新しい契約)及び、「福音文書集」(evangelicum instrumentum)と「使徒文書集」(apostolica instrumenta)などの用語もある。彼は、旧約書と新約書を区別した上でその両方を「両契約文書」(instrumentum utriusque testamenti)として統一的に捉えたのである。

彼が旧約文書で正典視しているのは、ルツ記、エステル記、ハガイ書を除いた他の全ての現行の正典文書である。新約文書では、ヤコブの手紙、ペテロ第二の手紙、ヨハネの第二の手紙、ヨハネ

の第三の手紙については取り上げていない。その他は四福音書、パウロの十三巻の書簡、使徒言行録、公同書簡、黙示録など全てを正典と見做している。

テルトウリアヌスは、聖書の言語に法律用語を取り入れたが、それだけでなく、信仰基準(regula fidei) というものを樹立させた。この基準(regula)という概念は、「正典」(カノン)と同じ言葉(regulaのギリシャ語訳が κανων)であるからである。カノンとは「まっすぐな棒(特に葦の茎)」ないし棹を意味し、それが転じて物差しの意味を持つようになり、哲学や修辞学の分野で原則とか標準の意味で用いられた。彼は此の概念を多岐にわたって用いた。例えば、「秘義の基準」(regula sacramentorum)は神とキリストとの統一であり、「希望の基準」(regula spei)復活の教義を意味する。彼の用いた「基準」という概念は後の「正典」成立に、大きな影響を与えたのである。

(5) アタナシオス

現行新約聖書27巻を、初めて「正典」として提示したのがアタナシオス(295頃～373年)である。彼は367年、エジプト諸教会の司教に宛て、『復活節書簡』と呼ばれる一通を書いた。当時、エジプトのアレクサンドリア周辺では、「外典」が「まことの書」と混同され、単純な信徒は異端者に欺かれて、それらを読むよう勧められていた。彼は、こうした異端者を「死せる者」と呼び、正統信仰を持つ者を「救いのための神的書物の所有者」と呼んでいる。この「神的書物」は、初めから御言の目撃者・奉仕者であった使徒たちが、我々の父祖に伝えたものである。その書物の内容として次のように挙げている。四つの福音書(マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ)。使徒言行録、公同書簡と呼ばれる使徒たちの七つの書簡(ヤコブ書・ペテロ書が二つ・ヨハネ書が三つ・ユダの書)、パウロの14の書簡(ローマ書・コリント書が二つ・ガラテヤ書・エペソ書・ピリピ書・コロサイ書・テサロニケ人へ書が二つ・ヘブル書・テモテ書が二つ・テトス書・ピレモンへの書)、最後にヨハネの黙示録がある。これらは救いの泉であって、渴いてい

る者は、これらの中にある御言によって満足させられるのであり、これらの中においてのみ、信仰の教えは宣べられている。何人も、これに加えたり、取り除いたりしてはならない。

アタナシオスによって、新約聖書27巻が「正典」として、他の文書から区別されたが(367年)、それが全教会で一致して採用されたわけではない。それには教会会議の議決が必要であった。

3. 教会会議

ガリラヤの一地方におけるイエスの教えが、彼の死後、弟子たちによって伝えられ、その伝承が編集され新約文書として継承された。使徒時代から使徒後教父時代の異端との闘いを経て、いよいよ教会会議で「聖書の正典」化の決着を迎えるのである。

そもそも、教会会議と何か。最初の会議は、使徒たちによって開催されたエルサレム会議である。会議の経緯は、使徒言行録15章に記されている。案件は異邦人キリスト者に対する律法の厳守、とりわけ「割礼」執行の有無である。この会議で採決されたのは、「偶像に供えて汚れた肉と、みだらな行いと、絞め殺した動物の肉と、血とを避けること」(15章20節)であった。キリスト教の教会会議とは、信徒の集まりを保持するための法と秩序を制定する機関である。カール・バルトは、「聖書という正典にどの文書をいれるかどうかを決める基準は何ですか」という質問にたいして、「教会の総会や公会議で決定する」と答えている。⁽²⁸⁾ バルトは、その場合、ルターにならって「ヤコブ書」を除くこともできるし、「十二使徒の教訓」や「ディオグネトスへの手紙」のような文書を正典の中に入れることも可能だと述べている。しかし、正典はそれ自身の正典性によって正典となったのであり、教会会議が果たした役割は、後からの確認に過ぎないと述べている。⁽²⁹⁾

聖書の「正典」成立は、397年のカルタゴ会議で最終決定されたわけであるが、そこに至るまでに、ローマ教会会議、ラオデキア会議、ヒッパ会議が開催された。

(1) ローマ教会会議

ローマ教会会議は、382年教皇 Damasus が招集して開催された。参加者は西方の教会からアンブロシウスと司祭たち、バルカン半島の司祭たち、東方教会からは同年コンスタンティノポリスで開催された会議から派遣された使節、それにヒエロニムスである。ヒエロニムスは、40歳の司祭であったが、教皇の信任を得て会議を主導した。彼は聖書をラテン語(ウルガタ)に翻訳して後に名をのこした司祭である。

ここで議決された新約正典は二七書である。特徴は、ヨハネの黙示録と使徒言行録がパウロ十四書簡の後におかれ、その次に七公同書簡が置かれていることである。この「ローマ正典」は、基本的にはアタナシオスの正典と同一である。

(2) ラオデキア会議ローマ教会会議

ラオデキアでの会議は363年に行われた。教会会議で聖書正典が初めて論ぜられ、それが目録として記録されたのは、ラオデキアの会議が初めてと言われている。⁽³⁰⁾ この会議で60条の教会法令(カノン)が制定された。その第59条は「個人によって作詩された私的な詩や、正典とされていない書物は、教会で読まれてはならない。ただ旧・新契約の正典(τα κανονικα)のみが読まなければならない」。第60条「読むべきものとして承認されなければならない旧契約の書物とは、次のものである。世界の創造の記、エジプトからの脱出記、レビ記、民数記、申命記、ヌンの子ヨシュア記、士師記、ルツ記、エステル記、列王記一卷・二巻、列王記三巻・四巻、歴代志一卷・二巻、エズラ記一卷・二巻、詩篇、ソロモンの箴言、伝道の書、雅歌、ヨブ記、十二預言者、イザヤ書、エレミヤ書、バルク書、書簡、エゼキエル書、ダニエル書である。

新契約の書物とは、四つの福音書、使徒言行録、七つの公同書簡(ヤコブの手紙一通、ペテロの手紙二通、ヨハネの手紙三通、ユダの手紙)、十四のパウロ書簡(ローマ人へ一通、コリント人へ二通、ガラテヤ人へ一通、エペソ人へ一通、ピリピ人へ一通、コロサイ人へ一通、テサロニケ人へ二通、ヘブル人へ一通、テモテへ二通、テトスへ一通、ピレモンへ一通)。この目録にはヨハネの黙示録が入っていない。旧約正典の書名の配列も独特なも

のである。

(3) ヒッポ会議

393年10月8日、アフリカのヒッポ・レギウスにあるバシリカ・パキスで開催された教会会議は、アフリカ教会の「広域教会会議」(general synod)であった。391年からヒッポの司祭となったアウグステイヌスは、彼の『再考録』や『手紙』の中で、この会議について触れている。⁽³¹⁾それによると、8月13日に予備会議を開き、「ヒッポ会議教規要約」が作製された。

(4) カルタゴ会議

419年に開催されたカルタゴ会議で議決された「アフリカ教会教令法典」は、正典目録を示しているが、これは393年のヒッポの会議、397年のカルタゴ会議の教規が朗読されて議決されたものである。残念ながら、397年のカルタゴ会議に関する記録は不十分なもののしか残されていない。アウグステイヌスは、正典決議は397年のカルタゴ会議の教規において行われたと理解している。「ヒッポ会議教規要約」と「アフリカ教会教令法典」は殆ど同一で、内容は次の通りである。

「正典的書物」(scriptura canonica)のほかに、いかなる書物も「神的書物」((divina scriptura)の名のもとに読まれてはならない。正典的書物は次の通りである。

旧契約書は、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記、ヨシュア記、士師記、ルツ記、列王記四卷、歴代志二卷、ヨブ記、ダビデの詩篇、ソロモンの書五卷、預言者の一二卷、イザヤ書、エレミヤ書、ダニエル書、エゼキエル書、トビト書、ユデイト書、エステル記、エズラ記二卷、マカベア書二卷。

新契約書は、福音書四卷、使徒言行録、使徒パウロの一三の手紙、彼がヘブル人に宛てた手紙、ペテロの二つの手紙、ヨハネの三つの手紙、ヤコブの手紙、ユダの手紙、ヨハネの黙示録。

以上のようにアフリカ教会は4世紀末には、アタナシオスが挙げた27書と同じ正典を有してお

り、教会会議はそれを追認したのである。アウグステイヌスは、393年のヒッポの会議と397年と419年のカルタゴ会議に司教として出席して、会議を推進したと言われている。

五. 結 語

新約聖書は、27の文書から成立している。しかし、27文書に限定されるまでには、紆余曲折を経てきたのである。397年のカルタゴ会議において、『聖書正典』が制定されたわけであるが、それで全てが決着したわけではない。古代の教会会議は、正典目録を制定しても、それをキリスト教世界全体に強制することができなかった。従って新約27文書が、西方と東方教会において主流となってからも、使徒言行録、ヘブル人の手紙、共同書簡を受容しない教会があったり、逆に外典や偽典を好む教会もあった。

宗教改革者のM. ルターは、ヘブル人への手紙、ヤコブの手紙、ユダの手紙、ヨハネの黙示録を正典とすることに批判的であった。カルヴァンはヨハネの黙示録、ヨハネの第二、第三の手紙を無視していたのである。⁽³²⁾

日本聖書協会では、1987年に『新共同訳聖書』を刊行したが、それには「旧約聖書統編つき」も出版している。統編とは次の文書である。

トビト記、ユデイト記、エステル記、マカバイ記一・二、知恵の書、シラ記、バルク書、エレミヤの手紙、ダニエル書捕遣(アザルヤの祈りと三人の若者の賛歌・スザンナ・ベルと竜)、ズラ記(ギリシャ語)、エズラ記(ラテン語)、マナセの祈り。

旧約聖書は、本来はユダヤ教の教典である。それが何故キリスト教の『正典』でもあるのか。この疑問はドイツのナチ時代、重要な問題となった。ナチはユダヤ人排斥から必然的にユダヤの文書も排除せねばならなかったのである。旧約聖書と新約聖書を神の言葉として承認するのではなく、〈民族の法と神の律法〉、〈民族性と創造〉、〈民族のノモスと神の律法〉、という二重の概念が登場した。これに対してカール・バルトは〈旧約聖書と新約聖書の二重の証言〉という次のよう述べている。「教会は一度限り語られた神の御言葉を、聖書の旧約と新約という二つの構成要素において

互いに限定しあう二重の証言によって、すなわち、モーセと予言者たちによる来るべきイエス・キリストについての証言と、福音書記者たちと使徒たちによる、来たり給うたイエス・キリストについての証言とによって、聴くのである。旧約聖書と新約聖書は同じものではない。この二つの言葉においてのみ、神の国の到来について語られるのである。一方を取り去る者は他方をも取り去ってしまう」⁽³³⁾。

1997年10月4日記

注

- (1) 司馬遼太郎・山折哲夫『日本とはなにかということ』日本放送出版協会 1997年6月 p. 27
司馬遼太郎と山折哲夫は対談の中で「国家神道は、よく考えて見れば、＜万世一系ノ天皇＞だけでは、やはり近代国家の精神的基軸としては弱い。堅固な中心軸となりえない懸念があったのではない。その強化策の一つとして、儀礼的に荘厳にする装置をつくりだそうとしたのですね。伝統的な神道の中から儀礼の部分を取り出して切り離し、天皇を中心とする祭りのシステムを作りあげました」。国家神道は明治時代にできたものなのである。
- (2) 文化庁文化部宗務課『宗教法人読本』昭和55年9月 p. 12
- (3) 大法輪編集部『仏教・キリスト教・神道・どこがちがうか』平成4年2月 p. 7
- (4) 同上 p. 13片山文彦(花園神社宮司・東京女子医大講師)
- (5) 同上 p. 21
- (6) 同上 p. 22
- (7) 同上 p. 25
- (8) 同上 p. 50佐野和史(神社本庁教学研究所研究室長)
- (9) 同上 p. 52
- (10) 同上 p. 53
- (11) 渡辺照宏著『仏教』岩波新書 1995年4月 p. 45
- (12) 比屋根安定著『日本宗教史』日本基督教団 昭和37年9月 p. 70
- (13) 同上 p. 72
- (14) 同上 p. 162
- (15) 『聖書事典』日本基督教団出版部 昭和37年 p. 28
- (16) 同上 p. 8
- (17) 新井 献編『新約聖書正典の成立』日本基督教団出版局 1988年 p. 327 聖書正典の公認は一般には、497年のカルタゴ会議において決定されたと言われているが、393年のヒッポ会議の『教規要約』を追認したのである。
- (18) 石原 謙著『キリスト教の源流』岩波書店 昭和47年 p. 74
- (19) 「ニカイア・コンスタンチノポリス信条」は、「父・子・聖霊」という三位一体なる神についての信条である。「我らは、全能の父なる唯一の神、点と地、すべて見えるものと見えざるものとの創造者を信ずる。我らは、唯一の主イエス・キリスト、あらゆる代のさきに御父より生まれたまえる、神の生みたまえる独りの御子、光より出でたる光、真の神より出でたる真の神、生まれ給いて造られず、御父と同質なる御方を信ずる。…我らは、聖霊、主となり活かし、御父と御子とより出で、御父と御子とともに礼拝せられ崇められ預言者らを通して語り給う御方を信ずる…」
- (20) 田川建三著『書物としての新約聖書』勁草書房 1997年6月 p. 52
- (21) 荒井 献著『新約聖書外典』講談社 1974年 p. 358-363
- (22) 荒井 献著『隠されたイエス・トマスによる福音書』講談社 昭和59年4月 p. 80
- (23) 同上 p. 84
- (24) 荒井 献編『新約聖書正典の成立』日本基督教団出版局 p. 197
- (25) 同上 p. 123
- (26) 同上 p. 160
- (27) 同上 p. 163
- (28) ゴッドシー編、古屋安雄訳『バルトとの対話』新教出版社 1965年 p. 116
- (29) KARLBARTH TYO『Kirchliche Dogematik』EVANGELISCHER VERLAG ZOLIKON ZURICH 1959年 p. 525
- (30) 荒井 献編『新約聖書正典』p. 324
- (31) 同上 p. 327
- (32) 同上 p. 331
- (33) ベルトルト・クラッパード著、寺園喜基訳『和解と希望』新教出版社 1993年 p. 213

参考文献

- 『宗教法人読本』文化庁文化部宗務課(昭和55年9月)
『仏教聖典』仏教伝道協会 1996年
『仏教・キリスト教・イスラム・神道・どこがちがうか』大法輪編集部(平成4年2月)渡辺照宏著『仏教』岩波新書(1995年4月)
比屋根安定著『日本宗教史』日本基督教団出版部(昭和37年9月)
『聖書事典』日本基督教団出版部(昭和37年7月)
荒井 献編『新約聖書正典の成立』日本基督教出版局(1988年1月)
荒井 献著『新約聖書外典』講談社(1974年)
荒井 献著『隠されたイエス』講談社(昭和59年4月)
石原 謙著『キリスト教の源流』岩波書店(昭和47年2月)
柏井 園著『基督教史』新教出版社(昭和31年7月)
H.コンツエルマン著、田中勇二訳『原始キリスト教史』日本基督教団出版局(1985年3月)
半田元夫・今野國雄著『キリスト教史』山川出版社(1984年9月)
田元夫著『原始キリスト教史論考』清水弘文堂(昭和47年3月)
田川建三著『書物としての新約聖書』勁草書房(1997年6月)
ベルトルト・クラッパード著、寺園喜基訳『和解と希望』新教出版社(1993年9月)